

役場の対人援助論

(4 2)

岡崎 正明

(広島市)

自分と相手と世界のとらえ方

ポーッと生きてます

先日なんとなくテレビを見てみると、永遠に5歳の女の子が大人に疑問をぶつけては答えられないと罵るという某人気番組で、「なぜ惑星というのか？」というテーマをしていた。

天文学のことはほとんど分からない私でも、「惑星」が地球とか火星とか金星とかを指す言葉で、恒星（太陽みたいに自ら燃えて光っている星）の周りを規則正しくぐるぐる回っている（いわゆる公転している）星のことを意味するくらいは知っているが、言われてみれば確かになぜ「惑星」と書くのか。その理由はさっぱり見当もつかなかった。

番組の解説によれば、昔の天文学者たちはいく日も星を観察する中で、オリオン座やカシオペア座など、通常の星々が決まった季節・日時に決まった動きをする（それらは恒星で自らが動いているのではなく、地球の自転や公転で動いて見える）のに対し、火星や金星は右へ行ったり左へ行ったり、一見不規則にフラフラと動いて見えることから「惑う星」＝「惑星」と名付けたとのことだった。

ちなみにその名づけの際、東京大学は「惑星」を推したのに対し、京都大学は「遊星」を推して長年議論になったとのエピソードが語られており、「遊星のほうがなんとなく楽しそうな雰囲気がいいな」と感じた（どうでもいい個人の感想だが）。

この手の雑学は日常の中で次第に忘れていくのが常なのだが、この惑星のことについてはなんだか心に残った。

児童虐待や家族問題が今の私の仕事の中心だが、そうした渦中の家族について知ろうとするとき、私たち支援者はなんとなく無意識に物語の聞き手のように、小説を読む読者のように、己のポジションを位置づけているような気がする。

例えば 18 歳で A 男を出産したこの母親は、20 歳で夫の DV で離婚して隣接市に引っ越し、生活保護を受けている。不眠や不安から複数の精神科受診を繰り返し、薬物を多量に摂取してしまう。A 男は保育園に通うが、休みがちで 5 歳だがオムツがとれていない。

こんな話を聞くと支援者側は、それぞれが得てきた経験や価値観を使って家族をイメージし、「こういうお母さんってこんな感じかな?」「こんな人ってこんなパターン多いよなー」と客観的に理解を進めようとする。そしてこの状況のリスクや、逆に強みについてあれこれ考え、どんな支援があればいいのか?に思考を発展させる。

その見立てやアセスメントがどれだけの的を得ているかはともかく、考え方の流れは多くの支援者が同じようなものであろうし、それに異議を唱えるつもりもない。

ただ一点だけ気をつけたいと思うのは、私たちは本当にまっさらな聞き手なのか?中立な読者なのか?ということである。

本当に地球は動いてる?

星の話に戻るが、昔の人類は地球が動いている(公転している)ことを自覚できていなかった。ガリレオの「それでも地球は動いている」は有名な言葉だ。さらにそれより昔の人々は、地球が丸いことも自覚できていなかった。

私はそれをバカにする気になれない。教科書で習ったから分かったつもりでいるものの、私は自分の人生の中で地球が公転・自転しているのを真に実感できたことなどない。「丸いところに住んでてどうして落ちないの?」とこどもに問われても、うまく説明ができる自信もない。

私の実感はといえば、毎日決まったあたりから太陽が昇り、そしていつも決まった方角に沈んでいく。動いているのは太陽や月で、私が住む大地は不動。これが正直な体感である。おそらく世間も似たようなもので、だから土地のことを不動産と呼ぶのだろう。

昔の天文学者は火星が右往左往するのを見て「惑星だ!」と名付けた。なるほどという感じだが、実はおのれ(地球)も同じように動いていることが分かっていなかった。火星から言わせれば「お前もやんけ!」とツッコまれるところだ。

同じように私たち支援者も、自分もそれなりに偏った物語を生きている主人公である前提を忘れがちで、相手を見て「変な動き」「乱暴だ」「非常識だ」と決めつけていやしないだろうか。

以前フィリピン人家族の小学生のこどもが、親から耳にピアスの穴を開けられたとのことで、「これって虐待でしょうか?」と関係者から聞かれたことがある。また何かの本で読んだが、欧米でアジア系住民が鍼や灸治療をこどもにしたところ、虐待ではないのか?との問題が生じた例があったようだ。

文化・習慣の違いは外国とだけでなく、地域でも、さらに言えば家ごとでも様々で、それを一方的に「変!」ということの危険性を、私は常に頭に入れておきたいと思っている。もちろん「叩いて躡けるのがうちの文化だ!」なんて明らかに法律や人権に違反する

ことを容認する気はないけれど。

セーフかアウトかを、中立でない私がジャッジすることの危うさを自覚しつつ、重要なのはそのことで、こどもなど弱い立場の人に実害やしわ寄せがきてやしないか？「基本的人権の尊重」という憲法で約束されたことが守られているか？だと思っている。

お互いさまで、歪んでいる

先日、小学5年生の我が娘と「外国の人（おそらく欧米系）が挨拶でキスやハグをするのはいいけど、どうして日本人が触ったり抱き着いたらセクハラなのか？」という話になり。娘も「外国人だったらされてもいい気けど、日本人だったら嫌よ！」と述べていた。しかし言った先から「同じ人間なのになんでかね？」と親子で首をかしげたのだった。考えたら確かに変な話だが、そこには大事なものは起きた事実だけでなく、動機や目的、意識、文化の違いといった、目に見えない要素が複雑に絡み合っているということだろう。やっぱり私たちは偏り・歪んでいると思った。

だから大事なものは「偏見をなくす」ことではなく、「自分には偏見がある」ことを自覚する。色付きの眼鏡で世界を見ている前提に立つ。まずはそういうことなのだと思う。私たちは誰からも中立な、神様みたいな存在にはなれないのだ。

自分もグルグル回る地球から見て「火星は惑って動いてるから惑星な！」ではなく、教科書の絵図のように太陽系を俯瞰して眺める視座に立つ。絶景を見渡すドローンのような視点を意識する。その大切さを改めて感じる。「ああ、俺もアイツもみんな動いてるじゃん」という境地に至ることは、システム論にも通じる発想だと思う。

そんな他者と自分の捉え方が大切なのは、なにも支援者・当事者間だけの話ではないだろう。

例えば児相と警察・学校などの関係機関同士の間だったり、さらに言えば同じ児相という組織内でも、違う部署になれば「どうしてこんな風に動いてくれないんだ」「〇〇はすぐこんなこと言うから困る」なんてことが起きるのは、よく聞く話だ。

おそらくこれは対人援助の分野に限ったことではなく、どこの世界でも日々起きている理解不足やすれ違いで。ひょっとしたらこんなことが積み重なって、人は対立や紛争や、最終的には戦争に向かってしまうのかもしれない。規模や深度は違うけれど、構造は同じような気がしている。

私たちは似たもの同士だけど、永遠に分かり合えない他人同士。そんな百人百様が肩寄せ合って暮らすのがこの世界で。そこにはどうしても無理解や誤解、偏見や諍いが避けられない。そういう運命なのだろう。

でもそれは遡って考えると、命が同一コピーをひたすら生み出す単細胞分裂から、違う個体が結びつくことで新たな変化を生むことにした、生存戦略の結果なわけで。

私たちはひとつになれない寂しさや諍いと引き換えに、他者という隣人を得ることで、ここまで途切れることなく命をつなぎ、世界をこんなにも深く多様に味わえるようになったのだとも思う。